



総題 「ローマの信徒への手紙」における贖い

アドベンチスト聴覚しょうがい者友の会教材部

第 13 課 ほかはすべてちゅうしゃく注釈 山地 宏 2010, 9, 18~2010, 9, 25

〈ガイドの副読本より…いちばん大切なこと〉

1. はじめに 9月18日（土曜日）

今週は、ローマの信徒への手紙の最後の部分ぶぶん、14章から16章を主に学びます。特に14章と15章には、教会員同士の間で、お互いにどのようにあるべきか、といったことが書かれています。1章から8章では、パウロは神学的なメッセージを書いていると言われますが、実は、1章から8章の部分で、14章と15章でパウロが言おうとしているメッセージの下準備をしているんだ、と副読本の43頁を見ると書かれていました。そういう意味では、この14章と15章に書かれていることは、パウロがこのローマの信徒への手紙の中でも一番伝えたかったメッセージだと言えるのかも知れません。

2. 信仰の弱い兄弟 9月19日（日曜日）

14章の1節から3節に書かれている内容は、偶像ぐうぞうにささげられたかも知れない肉を食べることと関係のある内容ないようのようです。エルサレム会議で決められたことの中に、偶像にささげられた肉を食べないようにということが挙げられていました。しかし、市場で売られていた肉の中には、偶像にささげられた肉もあるかも知れませんでした。ですから、市場に行って肉を買うときに、この肉は偶像にささげられたものかも知れない、と思うと、その肉を買って食べてしまうと、自分は悪いことをしてしまった、という気持ちになってしまうかも知れません。そのような気持ちにならないように、ある人たちは、市場で売られている肉が偶像にささげられたものかどうか分からないような時には、肉を買わずに野菜だけを買って食べていたと言われています。いずれにしても、本当に偶像にささげられた肉なのかどうかはわからないことですし、わからないのならば食べてもかまわない、と考える人もいたのでしょう。食べる人も、食べない人も、自分の信じていることに従って決めていたのですから、どちらも正しいことをしていると、お互いのことを認めてあげれば、何も問題はありませぬ。しかし、問題は、自分と違う行動こうどうをしている人のことを、つつい批判ひはんてき的に見てしまう、ということです。自分と違う行動こうどうをしている人を見ると、非難ひなんしたり、あるいは軽べつけいべつしたりしてしまう。でもそれは、教会員1人1人を受け入れて下さっている神様の思いに反することです。肉を食べる人も、食べない人も、お互いの行動を受け入れることができれば問題はないのですが・・・。

3. 自分の量る秤はかりで 9月20日（月曜日）

大きな問題は、自分の取っている行動だけしか正しくない、と考えてしまうことにあるのかも知れません。確かに偶像にささげられた肉を食べないようにとエルサレム会議では決められました。この決議に従わなくてもいいんだ、という態度は明らかに間違った態度です。また、旧約聖書に書かれている清い肉けがと汚れた肉くべつの区別も、どうでもいいことだ、とは言い切れませぬ。でも、単純たんじゆんに白黒つけにくいことは、世の中にはたくさんあります。この肉が偶像にささげられたも

のかどうかということも、そのような、はっきりとわからないことの1つだったと思われま
す。偶像にささげられた可能性かのうせいが少しでもあるのなら、その肉を避けるべきだ、という考えもわかり
ます。しかし、偶像にささげられなかったかも知れないのなら、食べてもかまわないという考え
もわかります。できるだけ間違いがないようにしようと思うのであれば、前者の行動ぜんしや こうどうになりま
すし、わかる範囲はんいで間違いのないようにすればいいと思うのであれば、後者の行動こうしやになるでし
ょう。でも、結局けっきょくは自分の行動については自分で責任を持つということが大切なことであ
って、他人の行動について、自分の物差しものさで裁くことではありません。人を裁くことができるのは神様だけ
です。

4. 人を誘惑ゆうわくしない 9月21日（火曜日）

「食べてもかまわない」と考えている人は「食べなければならない」と考えている人ではない
はずです。つまり、食べても良いし、食べなくても良い人であるはずです。そういう人が「食
べてはいけない」と考えている人の見ている前で、わざわざ食べて見せるならば、その行動を見た
「食べてはいけない」と考えている人は挑発ちょうはつされているように感じないでしょうか。「食べては
いけない」と考えている人の前では「食べない」という自由を使えばいいわけです。また、食べ
物のことに関してよくわからない人や、あまり考えていない人の前では、食べるのか食べないの
かによって、その人に影響えいきょうを与えることになります。自分がまわりの人に良い影響を与える存在
になることができるように、よく考えて行動する知恵を神様からいただく必要がありますね。

5. 特別な日を守る 9月22日（水曜日）

ある人は、ローマの信徒への手紙14章4節から10節を取り上げて、安息日を守らなくても
良いことの証拠しょうことして使おうとします。パウロがローマ14：4～10で言っている、「ある日」
「特定の日」というのは何の日のことだったのでしょうか。ガラテヤ4：9，10を読むと「あ
る特定の日」に關係かんけいがあると思われることが出てきます。もしかしたら、パウロがここで言っ
ている「ある日」「特定の日」というのは、ガラテヤ4：9，10に出てきている日のことだったの
かも知れません。またある人は、パウロはここで「断食の日」のことを言っているのだ、と解釈かいしゃく
しています。どちらにしても、この「ある日」「特定の日」が、週ごとにめぐってくる第7日安息
日のことである、とはどこにも書かれていません。安息日のことをパウロが、人の考えこうとで尊
んとうとだり尊とうとばなかつたりを決めて良いようなものであると言っているとは考えにくいことです。

6. 祝福の祈り 9月23日（木曜日）

手紙の最後のほうで、パウロは神様のことを「忍耐なぐさと慰めみなもとの源みなもとである神」と「希望の源で
ある神」と「平和の源である神」と言っています。「慰め」は「励まし」と訳すこともできると
ガイドに書かれています。励まし、希望、平和—「信仰による義」を中心テーマとする手紙にふ
さわしい祝福の祈りです。パウロは16章の最後に、「信仰による従順」に導くために、福音すべが全
ての異邦人に知られるようになった、と書いています。この「信仰による従順」に異邦人を導く
ためにパウロは使徒とされた、とローマ1：5にも書かれています。パウロは最初と最後に同じ
言葉を使って、大切なことを強調きょうちようしていたと言われています。もう一度、この手紙のメッセ
ージ全体ぜんたいを振り返って、この手紙のメッセージは何だったのか、考えてみましょう。